受験番号	

氏　　名	

2023年度　東京未来大学入学者選抜試験
一般選抜　A日程（1月28日実施）

国語

【注意事項】

1　試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開いてはいけません。

2　試験時間は1科目60分です。

3　原則として、途中退出は認められません。試験中に気分が悪くなった人や、トイレに行きたくなった人は、手を高く挙げて監督者に知らせてください。

4　試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページ落丁・乱丁及び汚れ等に気付いた場合は、手を高く挙げて監督者に知らせてください。

5　試験開始の合図の後、受験番号・氏名を、問題冊子と答案用紙の該当欄にそれぞれ正しく記入してください。

6　解答は、シャープペンシル又は鉛筆で記入してください。

7　問題冊子の余白等は適宜利用してもかまいませんが、どのページも切り離してはいけません。

8　「やめ」の合図があったら速やかに筆記用具を机上に置いてください。

9　試験終了後、問題冊子、答案用紙はすべて回収します。

10　その他、必ず監督者の指示に従ってください。

I　現代文　一般選抜　A日程（1月28日実施）

次の文章を読んで、各問いに答えなさい。

早いもので、もう十数年も前のことになるが、私は米国イリノイ大学の言語学科で一年ほど、言語社会学を(ア)コウギしたことがある。毎朝、私が車で大学に行ってしまうと、家内は広い庭に草花を植えたり、地元の新聞を読んだり、好きなレース編みをしたりで、結構楽しく時間を使っていた。

ある日のこと大学から戻った私に突然、家内が、「英語で太陽の色は何色かしら」と言った。私が「そんなこと赤に決まっているじゃないか」と答えると、「そうでしょう、でもうまく合わないのよ」と、新聞のクロスワード・パズルを持って来た。

太陽の色（The color of the sun）というヒントに従って赤（red）を入れると、文字欄が三つ余ってしまうというのだ。私は変だなあと言いながらも、思いつくままにいろいろな色彩名を入れてみた。すると黄（yellow）なら上下・左右ともピッタリすることが分かったのである。

しかし太陽の色が黄色とは、どう考えても変だということで、さっそくアメリカ人の知人に電話をかけてみた。すると誰もが、黄色に決まっているじゃないか、どうしてそんな馬鹿なことを、わざわざ聞くのかといった調子なので、本当に驚いてしまった。

日本人である私たち二人の心の中には、小さな子供の頃から《白地に赤く、日の丸染めて、ああ美しや、日本の旗は……》の「日の丸」の歌をはじめ、白い御飯の真中に赤い梅干し一つの日の丸弁当、そして小さな子供たちの描く太陽の絵はみんな赤いクレヨンの丸だったことなどすべてが、太陽は赤いものという確信を育てていたのだ。それが黄色だなんて、それじゃ月じゃないか、というのが私たちの率直な反応だったのである。

ところで、英語で太陽が黄色ならば、フランス語やドイツ語ではどうだろうと、すぐ子供の絵本を開いたり、図鑑を出したりして調べてみると、ここでも太陽は黄色なのである。中には美しいレモン・イエローの太陽の横に、Le soleil est jaune.（太陽は黄色い）とか、Die Sonne ist gelb.（同上）とちゃんと書いてある絵本まで見つかった。

なんとも嫌なことは、私がこの時までこれらの本を見たことがないわけではないということである。自分に問題意識がないときは、せっかくの貴重な情報が目や耳に入っても、素通りしてしまっているのだ。いつも思うことだが、人間の目や耳は、カメラやテープレコーダーとは違い、自分の持つ固有の文化で、与えられた生の情報の一部を消去したり、自分に都合のよいように曲げて解釈す

る強い傾向を持っているので、新しいことに、私たちはなかなか気付かない。古人のいう「見れども見えず、聞けども聞こえず」こそ、（　①　）人間の正常なあり方だとさえ言えるのである。

さてこの事件をきっかけに、私は機会あるごとに、ヨーロッパの諸（　Ⅰ　）で、太陽は何色と考えられているかを調べてみた。その結果、これまでのところ、英語、フランス語、ドイツ語、イタリア語、スペイン語といった西ヨーロッパの(イ)言語圏では、太陽は一様に黄色いものとされていることが判明した。面白いことに、ロシア語は赤で、恐らくポーランド語も赤らしいから、東欧スラヴ語地域は日本語と同じく赤である可能性が高い。

この、英語では太陽が赤ではなく、黄色と考えられているという事実を、日本で知っている人は意外に少ないようである。それは私だけの調査や推測にもとづく結論ではない。太陽の研究を専門とされる宇宙物理学者の桜井邦朋教授が、その著書の中で、次のように述べておられることからも明らかである。

太陽の色といえば万国共通と、長い間私も考えていたが、実際、アメリカに住んで、その地の人々との話題の中から、太陽の色が、私が何の理由もなしに、ただ漠然と考えていた赤い色とちがうということを知った時には、いささかおどろかずにはいられなかった。

桜井邦朋『「考え方」の風土』講談社現代新書、一九七九年、四五頁

桜井教授は更に同書の中で、お子さんがアメリカにいた時は太陽をいつも（　a　）に塗っていたのに、日本に帰国してからは不思議なことに、今度は（　b　）で描くようになったことについて、これは日本社会の無意識の文化的強制の結果ではあるまいかといった、文化人類学者顔まけの考えを述べられた後、「私にしたところで、太陽研究にたずさわることがなかったら、たぶん今でも『真赤な』太陽とか、『赤い』お日様などといっていたにちがいないのである」と結んでおられる。

日本で学問的な目的を持って外国語を学ぶ人々は、今でもこの、太陽の色は言語（文化）が違えば違った色で認識されるというような事実に、余り関心を示さない。そんな小さなこと、子供じみたつまらぬ問題が、真面目な学問研究の(ウ)タイショウになるなんて、と明らかに軽蔑の色を隠さない人さえいる。

しかし文学、哲学、そして社会学といった、いわゆる人文・社会系の学問の(ウ)タイショウが外国である場合、研究の大半は外国語の文献を読むか、直接、外国人と外国語を使って交流することに限られてくる。

自然科学や技術の研究と違って、そこには具体的に眼に見えること、直接さわれるものがほとんどなく、また安心して使える客観的な数字も少ない。つまり、ことば（外国語）の（　Ⅱ　）だけが、頼れる唯一の決め手といっても言いすぎではない学問領域が、文学であり、哲学、社会学なのである。（　②　）数学を含む自然科学や技術の研究の場合にも、外国語の文献は必要であり、外国語を使って

交流することも大切である。ただその場合の外国語と、人文・社会系の学問での外国語とは、同じ言語ではあっても、両者は全くといってよいほど、性質が異なるのである。

簡単に両者の違いを言うと、前者では記号、つまり単語や文章は自己完結的であるのに、後者ではそれらの意味および限界が不明瞭なのである。つまり前者では言外の意味、その情報を裏で支える文化的前提や歴史的背景などは、ほとんど無視できるのに、後者、つまり社会・文化科学の文献では、むしろこの方が大事で、それを知らなければ与えられたテクストの正しい理解は全く望めない。

しかも困ったことに、このことはどこにも明示的に示されておらず、まさに《知る人ぞ知る》の状態におかれているのである。

更に難しいことは、自然科学的な言語情報の場合は、実験や観察、そして論理的な考察などによって、情報そのものの正しさを検証することが可能であるだけでなく、自分が外国語による情報を、正確に理解したかどうかをチェックする方法も数多く存在する。

たとえば外国の文献にある通りに、自分で何かを実際に行なってみて、うまく行かない時は、文献の読み方のどこかに誤りがあったのではないかという、自己検証の必要に迫られることなどである。

しかし外国文学の解釈や、社会科学的な文献の解読の場合には、これらすべてがほとんど無に等しい。それでも両者の間にこのような相違があることを、もし研究者が自覚していれば、人文・社会系の学問でも、たとえ大変な手間ひまはかかるにせよ、ある程度の検証は出来るのだが、多くの場合、肝心のその自覚が欠如しているため、自分が勝手に理解したことを、情報の正しい内容だと思ってしまうのである。

さて、言語社会学の調査などに無関係の読者の中には、大勢の人にアンケート用紙でも配って答を集計すれば、何語で太陽は何色だくらいのことは、何も苦労して何年もかけて調べなくとも分かりそうなものだと思われる方があるかも知れない。

しかし実際には、そう簡単にいかない理由がたくさんあるのである。たとえば、私がパリ大学でいくつかの連続講演をした時、主催者側の一人であったR教授が、私を食事に招待して下さり、そこに旧知のW博士も加わった。その際、私がフランス語の太陽の色はと尋ねたところ、お二人とも赤だといわれたのである。

パリ大学のようなフランスの国立大学には、国籍はいうまでもなくフランスで、学問も優れ、フランス語の運用は非の打ちどころなしという文句のつけどころのないフランス人で、実は生まれ育ったのは外国という人が大勢いる。私がこの二人のフランスの学者にフランス語での太陽の色を尋ねたのは、実は事前にR教授がロシア育ちで、W博士がポーランド出身だということを知ってのことなのだ。お二人のそれぞれの母語では、太陽は赤だからである。無意識に染み込んだ文化は、なかなか変わらないのだ。

つまり私の言いたいことは、人々の育った文化的背景を知らずに、言語についてただ質問したり、アンケートを取ったりすると、外国では様々な人が混ざっているため、結果は全く信頼できないものとなることがあるという点である。

ところが、どこで生まれたのか、どのような教育を何歳までどこで受けたのかといった質問は、いまほとんどの先進国ではタブーなのである。日本人には想像も出来ないほど、人々はこのような個人情報を他人に与えるのを嫌う。

だからフランス語の問題はフランス人に聞けばすぐ分かるはずだとか、ある英語の疑問点をめぐって、自分がイギリス人に直接聞いたから絶対間違いないなどという人をよく見かけるが、こと（　Ⅲ　）に関する限り、相手は誰でもよいというわけにはいかないのである。小さなことでも、結論は時間をかけて、あらゆる面から資料を集め、総合的に判断していくしか方法がないのである。

このような意味で、外国の子供たちの行動、子供向けの絵本や資料は、文化情報の宝庫である。ところが私たち日本人にとって、日本にいて最も取りにくい情報が、実はこの外国の子供が、いったい何を読んでいて、何を知っていて、どう行動するのかといったことなのだ。

高級な文学書や哲学の本、難解な社会科学の文献などは、手をつくせば日本でもほとんど入手可能である。（　③　）、それを書いた人々が育った文化的背景は、暗黙の前提部分であり、また本を書いた人々にとっては極く当り前のことであるため、大人用の立派な本には全く顔を出さないものなのである。

外国語で書かれた文化や社会科学系の学問的文献を、辞書を頼りにいくら苦労して読んでも、肝心の隠れた土台の部分を知らなければ、作品全体の方向づけ、価値評価が狂うのは当然であろう。

私がこれまでたびたび、外国語の本を読んで、その意味が正しく分かるためには、そこに書かれていないこと、その本が成立する文化的な前提を知らなければ駄目だ、本に書いてあることは、そこに書いてないこととの対比で、初めて意味をなすのだという指摘をして来たのは、この事を指すのである。

（鈴木孝夫『日本語と外国語』岩波新書より）

一　文章中の（ア）・（ウ）のカタカナを漢字に直しなさい。（イ）の漢字は、読み方をひらがなで答えなさい。なお、漢字及びひらがなは丁寧に書きなさい。

ア　コウギ　　イ　言語圏　　ウ　タイショウ

二　文章中の①・②・③に当てはまる言葉を、それぞれについて、次から一つずつ選んで、記号で答えなさい。

ア　さて　　イ　たとえば　　ウ　なぜなら　　エ　だから
オ　要するに　　カ　しかし　　キ　むしろ　　ク　もちろん

三　文章中の（Ⅰ）・（Ⅱ）・（Ⅲ）に入る最も適当な言葉を、文章中の他の部分から探して、それぞれ漢字二文字で答えなさい。

四　文章中の（a）・（b）に当てはまる最も適当な言葉の組み合わせを、次から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア　（a赤　b黄色）
イ　（a赤　b赤）
ウ　（a黄色　b赤）
エ　（a黄色　b黄色）

五　次のア～オの文について、筆者の主張に合うものには○、異なるものには×をつけなさい。

ア　貴重な情報が入っても、「見れども見えず、聞けども聞こえず」状態なのは、自分が問題意識をもっていないからである。
イ　言語が違えば、太陽の色も違って認識されるのは当然のことであり、取り立てて問題にする必要もない。
ウ　人文・社会系の学問では、文献に書かれている情報を裏で支える文化的前提や歴史的背景が重要である。
エ　言語社会学では、大規模なアンケート調査によってかなり信頼できるデータを得ることが出来る。
オ　人文・社会系の研究では、本に書いてあることを正確に理解すること、そして、英語の問題ならば直接英国人に聞くことが重要である。

Ⅱ　言語事項・文学史　一般選抜　A日程（1月28日実施）

一　次の①～⑤の空欄に、下の［　　］の意味になるように、漢字一文字を書き入れなさい。なお、漢字は楷書で丁寧に書きなさい。

① （　）が高い。［得意になる］
② （　）を焼く。［取り扱いに困ってもてあます］
③ （　）が置けない。［遠慮なく、打ち解けてつきあえる］
④ 神仏への（　）敬の念。［崇高な存在をおそれうやまうこと］
⑤ 手ぐすねを（　）く。［十分に用意をして待ちかまえる］

二　次の四字熟語の中の誤字を一字抜き出し、正しい漢字に訂正しなさい。

① 朝礼暮改（　　）→（　　）
② 意心伝心（　　）→（　　）
③ 五里夢中（　　）→（　　）
④ 危機一発（　　）→（　　）
⑤ 音心不通（　　）→（　　）

三　次の①～③の問いに答えなさい。

①　次のA～Cの作品のそれぞれの作者について、後のア～コから一人ずつ選び、記号で答えなさい。

A　羅生門　　B　レモン哀歌　　C　富嶽百景

ア　幸田露伴
イ　坪内逍遙
ウ　芥川龍之介
エ　尾崎紅葉
オ　泉鏡花
カ　高村光太郎
キ　太宰治
ク　川端康成
ケ　中島敦
コ　大岡昇平

②　宮沢賢治の作品を一つ選んで、記号で答えなさい。

ア　恩讐の彼方に　　イ　或る女　　ウ　こころ
エ　春と修羅　　オ　山羊の歌

③　萩原朔太郎の作品でないものを一つ選んで、記号で答えなさい。

ア　詩の原理　　イ　青猫　　ウ　氷島

エ　月に吠える　　オ　赤光

Ⅲ　現代文　一般選抜　A日程（1月28日実施）

次の文章を読んで、各問いに答えなさい。

ウサギとカメが競走して足のおそいカメが勝ったという話は、世界の各地に生まれています。日本ではウサギが、

どんなにカメが　急いでも
どうせ晩まで　かかるだろう
ここらでちょっと　ひと眠り
グーグーグーグー　グーグーグーグー　（作詞　石原和三郎）

と、(ア)油断して眠ったために負けたことになっていますが、四十年前にディズニーがこしらえた漫画映画では、ウサギが女学校の女の子に自分の足のはやいところを見せていたことになっています。女の子にもてていい気もちになっているうちに、カメがゴール近くまでいってしまい、必死に追いかけたが鼻のさきのちがいで負けてしまったという話でした。

この映画はなかなかよくできていて、その年のアカデミー賞をとりました。

（　①　）数年前のことですが、私はある雑誌でこんな話を読んだ覚えがあります。

日本人のインテリが中国へ行って、中国の子どもたちにウサギとカメの話をしたら、子どものほうから、どうしてカメは眠っているウサギを起こしてやらなかったのか、と質問されたというのですね。

話した人は、思いがけない質問にめんくらうと同時に、おくれた仲間に協力の手をさしのべるのが正しいのではないかという子どもの主張を、もっともだと受けとったのです。

この報告を聞いて、同感し、私たちも反省しなければいけないといった人もありましたが、（　Ⅰ　）は見受けませんでした。読者のみなさんはどう思いますか？

話を「かけくらべ」でなく、オリンピックのマラソンに変えてみましょう。

これまで先頭を走っていた選手が、スタミナをなくしてとうとう道ばたに腰を下ろしてしまいました。あとからくる選手はどうすべきでしょうか？　そのまま全力をあげて走りつづけるのが正しいのか、（　②　）走るのを中止して腰を下ろしている選手に手をさしのべ、いっしょに走れるように努力するのが正しいのか、――こう考えてくると、中国の子どもの主張も何かおかしく思われてきませんか？

中国の子どもの主張に感心した日本のインテリは、ウサギとカメの競走の話は知っていても、A競走とはいったいどういうことかを理解していなかったのでした。

私たちは駅の前や学校の近くで、電車におくれまい、学校に遅刻しまいとして走っている人たちをよく見ます。ここにも競走と同じような、ぬいたりぬかれたりするかたちがあります。この場合にころんだ人がいたならば、ころんだ人に協力の手をさしのべるのが正しいことはいうまでもありません。

（　③　）ウサギとカメや、オリンピックのマラソンは、おたがいに（　Ⅱ　）をし、ルールにもとづいて走っているのです。それぞれは自分の持っている全力を自分なりにだし切ろう、相手に手をかしたり、かりたりするようなことはしないと、はじめから約束してあるのです。

まだおさなくて、競走がルールにもとづく行動であることの理解に欠けている子どもが、ウサギとカメの話に自分たちの集団生活の道徳をもちこんで、協力すべきだと主張したのはほほえましいまちがいでした。しかしこの主張を正しいもののように受けとった日本のインテリの失敗は、ほほえましいというわけにはいきません。

他人の主張したことを、いつもそれと似たさまざまな事実の中で(イ)吟味してみる訓練があったなら、すぐおかしいと気づくような失敗だからです。子どもの主張をきいたときはウッカリ同感しても、あとで冷静に考えてみるなら気づくはずの失敗だからです。

約束とかルールとかいわれるものは、人間の精神活動の産物として頭の中に存在しているので、それ自体を目で見ることも手にとることもできません。契約書とかルールブックとか文書になったときに、はじめてだれの目にも存在することがわかるのです。

「かけくらべ」の約束は別に文書をこしらえたわけではありませんから、競走を見ただけでは約束のない場合と区別がつかないのです。

現在（注、一九七〇年代当時）の日本の学校では、授業の方法に子どもたちの協力ということが入っていません。ですから、子どもたちは他の子どもがどうであろうと、覚えることが多すぎてついていけない子どもがあろうとなかろうと、そんなことにはかまわずに、ただもう自分の成績がよくなることだけを願って努力しています。

自分よりもできる子が病気で学校を休むと、同情したり協力したりするのではなく、心の中でばんざいをさけんだり、病気が長びいて成績の落ちることを期待したりしています。

これは、マラソンでうしろのほうにいる選手が、先を走っている選手が落伍することをのぞんでいるのと似ています。

教育のありかたはスポーツのありかたとはちがっていなければならないのに、現在の教育はスポーツ的なゆがめられたものになってしまっているのです。

もちろんまじめな教師は、これがいいことだとは思っていません。こんなまちがった教育のありかたはあらためなければならない、と思っています。子どもたちが協力しあうように、おくれた仲間にみんなが手をさしのべるようにしたい、と願っています。この願いだけがあまり強すぎると、こんどはそれがスポーツなら正しいのだということを、忘れてしまうのです。

中国の子どもが日本の場合とちょうど逆に、スポーツを教育的にゆがめて解釈したとき、それが逆のかたちのまちがいであることには気づかないで、子どもの側から協力の手をさしのべるべきだと主張したのはすばらしい、日本とはたいへんなちがいだと、讃美することにもなるのです。

インテリの報告に対して、反対論が出なかった一つの理由は、この[B]教育の願いの行きすぎにあったのではないかと、私は思いました。

（三浦つとむ『1たす1は2にならない』国土社より）

一　文章中の（ア）・（イ）の漢字の読み方を、ひらがなで答えなさい。なお、ひらがなは丁寧に書きなさい。

ア　油断　　イ　吟味

二　文章中の（①）・（②）・（③）に当てはまる言葉を、それぞれについて、次から一つずつ選んで、記号で答えなさい。

ア　それとも　　イ　けれども　　ウ　いわゆる　　エ　ところで
オ　なぜなら　　カ　その上　　キ　つまり　　ク　だから

三 文章中の（Ⅰ）・（Ⅱ）に入る最も適当な言葉を、文章中の他の部分から探して、それぞれⅠは漢字三文字で、Ⅱは漢字二文字で答えなさい。

四 傍線部A「競走とはいったいどういうことか」に対して、この答えに当たる部分を十文字で抜き出して答えなさい。

五 傍線部B「教育の願い」とあるが、この「願い」の内容を端的に示す言葉を、漢字二文字で答えなさい。

六 次に示す一段落が、本文中から欠落している。正しく挿入した場合、後に続く段落の最初の五文字を答えなさい。

> 協力の手をさしのべるべきだという主張を、野球の試合にあてはめると、投手はできるだけ打ちやすい球を投げるように、打者はできるだけとらえやすい球を打つように、自分のチームばかり点をとるのではなく相手のチームにもとらせるようにしなければいけない、ということになってしまいます。

問題は以上です。